

神社の杜(四十八)

「太占(ふとまじ)」

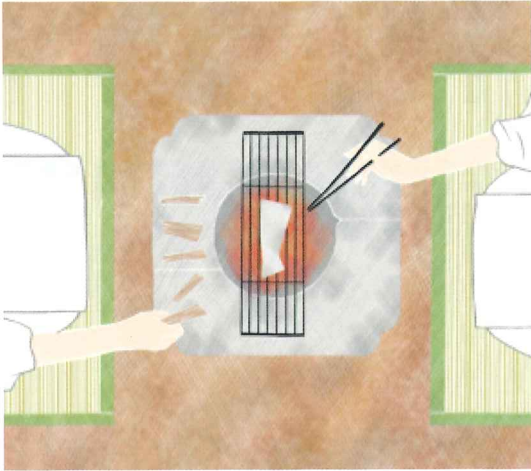
(その一)

片柳 茂生

春は寒暖の差多く遅霜に注意、梅雨明けは遅く、台風も多い。秋の長雨と気温低下に注意が必要。曰く本年の卦は、一見大凶作のように見えるが、実際はそれほど悪くないであろうとのこと。これは今年の太占祭での結果をみて、神社総代のお一人が出した二九年の気象の予想です。

此の鹿の肩甲骨を焼いて、作物の吉凶を占う太占祭は、正月の三日の早朝行われます。そしてこのお祭りだけは、一般の参拝者には非公開となっています。今回は、この太占祭を紙面で皆さんに公開してしましましょう。でも後で宮司からクレームがつくかも……。

まずこの太占祭に関わる神職は、宮司を筆頭に



イラスト：紺野美織

祭員五名、ほかに伶人三名、典儀一名の都合九名に神職の参列者が加わるという以外に大所帯で行われます。宮司はじめ祭員の五名は、お祭前日の二日の夜神社に集まります。そしてお祭りの準備が始まります。

占いに使用する品物の中で一番大事な物、それは雄鹿の右の肩甲骨。これが無いとお祭りが成り立ちません。骨は夏に猟師さんから奉納されたものを水に浸け、半年間社務所の裏の手摺から吊るしておきます。何故かという骨に着いた肉をすべて落とすためにです。骨が奇麗になったらそれを乾かし、少し出っ張った部分を削り落として準備完了。次に薪三束、バーベキューをするような薪ではありません。もつと細くて短いもので、三方に乗る程度の量です。昔は薪の材料に波波迦(ウワミスズクラ)の木を使ったと古文書等にはありますが、今では御神木の杉を細く割って使っています。そして算盤(そろばん)。これは神前にお供えはしますが、実際に使っているところを見たことはありません。と、これで品物は揃いましたが、まだまだ準備は続きます。

火鑪(ひろ)を使って火を熾(も)します。マッチやライター、ましてやガスコンロなんかで炭を熾すようなことはしません。普通通りのやり方で火を熾します。その前に火鉢にわらを燃やして灰を作っておくことを忘れてはいけません。せつかく熾した火を炭に移し、それをお祭りの時まで消さないようにするためにです。

もう一つやっておかなければならないことがあります。骨の形を半紙に写し、骨の中心から放射状に二本の線を引きます。そして紙縋り(こより)も二十五本作り、どの線が何の作物か籤(くじ)を引いて決めるのです。火を熾すのは若い神主の仕事、こちらは偉い神主さんもお仕事と役割が決まっているようです。

おっと、長話をしていたら、前日の準備で今回は終わってしまいました。お祭り本番は次号で。

表紙写真

「武蔵御嶽神社」

平成二十九年の春、美しく鮮やかな社殿に、清々しく彩りを添えた青い空。美しく清らかな世界であることを祈ります。

撮影：TOKYO Eagle Eye

あとがき

本紙中に於いて「再生」「誕生」という言葉を数回使わせていただきましたが、それは式年に限るわけではございません。日々の生活の中でも、「再生」や「誕生」を繰り返して生きていけるものだと思います。そして、生活環境の見直しや、被災地などの復興という「再生」や「誕生」も忘れてはいけません。

式年大祭という行事が、「再生」「誕生」への気づきの一端となれば幸いです。

奉納俳句選者岡田日郎先生、朝霞市広沢講中講元芳野浅嗣様、フォトグラフィアー鶴巻育子様、片柳茂生様、玉稿をありがとうございました。

平成二十九年 三月三十一日発行

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四二八(七八)八五〇〇
FAX 〇四二八(七八)九七四一

印刷 ㈱成和印刷
http://www.nusashimitakejinja.jp/